Program

「協奏曲の夕べ」

2016年7月1日(金)

指揮:現田茂夫／管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団

スクリャービン:ピアノ協奏曲 嬰ヘ短調 Op.20

Scriabin:Piano Concerto in F-sharp minor Op.20

第1楽章	アレグロ	1st mov. Allegro
第2楽章	アンダンテ	2nd mov. Andante
第3楽章	アレグロ・モデラート	3rd mov. Allegro moderato

休憩

ラフマニノフ:ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 Op.18

Rachmaninov:Piano Concerto No.2 in C minor Op.18

第1楽章	モデラート	1st mov. Moderato
第2楽章	アダージョ・ソステヌート	2nd mov. Adagio sostenuto
第3楽章	アレグロ・スケルツァンド	3rd mov. Allegro scherzando

◆ 全国公演スケジュール ◆

7月1日(金)	東京	東京オペラシティ コンサートホール(協奏曲)	主催:ジャパン・アーツ
7月2日(土)	西宮	兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール	主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター
7月3日(日)	京都	京都・青山音楽記念館バロックザール	主催:公益財団法人青山財団
7月6日(水)	東京	東京オペラシティ コンサートホール	主催:ジャパン・アーツ
7月7日(木)	東京	東京文化会館	主催:公益財団法人都民劇場
7月9日(土)	豊田	豊田市コンサートホール	主催:公益財団法人豊田市文化振興財団、豊田市・豊田市教育員会

Program

「リサイタルの夕べ」

2016年7月6日(水)

J.S.バッハ／リスト編:前奏曲とフーガ イ短調 BWV543／S.462-1

J.S.Bach ／ Liszt:Prelude and Fugue in A minor BWV543／S.462-1

グリーグ:ピアノ・ソナタ ホ短調 Op.7

Grieg:Piano Sonata in E minor Op.7

第1楽章	アレグロ・モデラート	1st mov. Allegro moderato
第2楽章	アンダンテ・モルト	2nd mov. Andante molto
第3楽章	アラ・メヌエット、マ・ポーコ・ピウ・レント	3rd mov. Alla menuetto, Ma poco più lento
第4楽章	モルト・アレグロ	4th mov. Molto allegro

グリーグ:ノルウェー民謡による変奏曲形式のバラード Op.24

Grieg:Ballade in the Form of Variations on a Norwegian Folk Song Op.24

休憩

モーツァルト:ピアノ・ソナタ 第9番 ニ長調 K.311

Mozart:Piano Sonata No.9 in D major K.311

第1楽章	アレグロ・コン・スピーリト	1st mov. Allegro con spirito
第2楽章	アンダンテ・コン・エスプレッシオーネ	2nd mov. Andante con espressione
第3楽章	ロンドー～アレグロ	3rd mov. Rondeau～Allegro

モーツァルト:ピアノ・ソナタ 第14番 ハ短調 K.457

Mozart:Piano Sonata No.14 in C minor K.457

第1楽章	モルト・アレグロ	1st mov. Molto allegro
第2楽章	アダージョ	2nd mov. Adagio
第3楽章	アレグロ・アッサイ	3rd mov. Allegro assai

モーツァルト:ピアノ・ソナタ ヘ長調 K.533／494

Mozart:Piano Sonata in F major K.533／494

第1楽章	アレグロ	1st mov. Allegro
第2楽章	アンダンテ	2nd mov. Andante
第3楽章	ロンド～アレグレット	3rd mov. Rondo～Allegretto

原 明美（音楽評論家） Akemi Hara

スクリャービン（プレトニョフ編）：ピアノ協奏曲 嬰ヘ短調 Op.20

神秘主義と呼ばれる作風を示し、「神秘和音」という独特の和声語法を用いたロシアの作曲家A.スクリャービン（1872-1915）は、ピアノの名手であり、遺作も含む約12曲のソナタをはじめ、独自のピアニズムと和声が響く独奏曲を数多く残した。ピアノ協奏曲は、今回演奏される1曲しかないが、独奏ピアノを含む編成による交響曲第5番「プロメテウス」も、協奏曲に近いといえよう。

1897年、スクリャービン青年期の作であり、彼自身のピアノで同年初演されたOp.20は、独奏ピアノの繊細な旋律線などにショパンの影響が表れた協奏曲である。なお今回は、ソリストのプレトニョフ自身がオーケストラ・パートの一部に手を加えた編曲版で、演奏されるという。

第1楽章：アレグロ。嬰ヘ短調、ソナタ形式。オーケストラの弱奏に続く独奏ピアノの、モノローグ風の開始は特徴的。展開部が短いため、楽章の規模は、やや小さい。

第2楽章：アンダンテ。嬰ヘ長調、変奏曲形式。主題のあと、4つの変奏が続き、最後に再び主題が戻る。

第3楽章：アレグロ・モデラート。嬰ヘ短調、ロンド形式。スクリャービンが後年打ち出す神秘和音を予告するような、耽美的な響きを印象づける。

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 Op.18

壮大なスケールとロシア的な情緒のなかに、ピアノの華麗なテクニックが盛りこまれ、甘美な名旋律に彩られたこの第2番は、ピアニストとしても活躍したロシアの作曲家S.ラフマニノフ（1873-1943）の、最もポピュラーなピアノ協奏曲である。1897年のこと、彼は、交響曲第1番の初演が失敗に終わってノイローゼに陥っていたが、その窮地を救ったのが、音楽好きの精神科医N.ダール博士だった。博士は催眠術を応用した治療を施し、「協奏曲の傑作を書きあげる」との暗示を与えたという。果たして、その暗示のとおり曲は1901年に完成し、ラフマニノフ自身のピアノで初演されて大成功を収めた。曲は、ダール博士に献呈されている。

第1楽章：モデラート。ハ短調、ソナタ形式。クレムリン宮殿の鐘の音を模したとされる、独奏ピアノの荘重な和音に始まる。第1主題は雄大なスケールで歌われ、第2主題は甘美でセンティメンタルである。

第2楽章：アダージョ・ソステヌート。ホ長調、3部形式。叙情的な美しさと、夢みるようなロマンティシズムが交錯する。

第3楽章：アレグロ・スケルツァンド。ハ短調～ハ長調、ロンド・ソナタ形式。華麗な独奏ピアノが、オーケストラと共に力強い楽想を展開する。

J.S.バッハ（リスト編）：前奏曲とフーガ イ短調 BWV543／S.462-1

原曲は、バロック時代のドイツが生んだ大作曲家J.S.バッハ（1685-1750）の、オルガン曲BWV543であり、別々の時期に書かれた「前奏曲」と「フーガ」を組み合わせた作品である。「前奏曲」は短いながら、不協和音と半音階的な進行の大胆な使用が注目される。「フーガ」は、チェンバロのためのBWV944を改作したものであり、エネルギッシュな展開を見せる。そして、今回演奏されるピアノ版は、ピアノの名手でもあった作曲家F.リスト（1811-86）が、1842年から1850年の間に編曲した「（バッハの）6つのオルガン前奏曲とフーガ」S.462に、第1曲として収められている。

グリーグ：ピアノ・ソナタ ホ短調 Op.7

ノルウェーの国民楽派を確立させた作曲家E.H.グリーグ（1843-1907）は、ドイツのライプツィヒ音楽院留学中から、ピアニストとしても活躍していた。彼のピアノ作品では、ピアノ協奏曲イ短調が最も有名であろう。ピアノ独奏曲としては、「抒情小曲集」など、小品ないし小品集が数多くあるが、ソナタは、このホ短調の作品ただ1曲である。

1862年にライプツィヒ音楽院を卒業したグリーグは、その翌年からしばらくデンマークのコペンハーゲンに住む。この町の郊外にある田園地帯に滞在した1865年の6月、わずか11日ほどで完成したと伝えられているのが、4楽章から成るこのソナタである。

第1楽章：アレグロ・モデラート。ホ短調、ソナタ形式。

第2楽章：アンダンテ・モルト。ハ長調、自由な変奏曲形式。

第3楽章：アラ・メヌエット、マ・ポーコ・ピウ・レント。ホ短調、3部形式。

第4楽章：モルト・アレグロ。ホ短調、序奏つきのソナタ形式。

グリーグ：ノルウェー民謡による変奏曲形式のバラード Op.24

グリーグの代表作の一つである劇音楽「ペール・ギュント」が完成されたころ、1875年～76年に書かれた作品。元来「物語詩」を意味する「バラード」という名称が付いていることから、何らかのストーリー性が含まれているとも想像されるが、作曲に至る事情や背景については、はっきりとしていない。

曲の主題に用いられているのは、ノルウェーの作曲家L.M.リンデマンが採集して和声をつけたという、ノルウェー中部ヴァルダール地方の民謡である。そして、この主題（ト短調、アンダンテ・エスプレッシーヴォ）のあと、全部で10の変奏が繰り広げられ、さらに、これに続くコーダによって、全曲が締めくくられる。楽想が変化に富み、ピアニストに幅広い表現力を要求する難曲である。

モーツァルト：ピアノ・ソナタ 第9番 ニ長調 K.311

W.A.モーツァルト（1756-91）は、音楽史上でも傑出した天才であり、5歳のころにピアノのためのメヌエットを作曲し、9歳ごろにはピアノ変奏曲も作曲し始めた。そして、ピアノ・ソナタについては、19曲ほどが残されている。

K.311は、モーツァルトがマンハイムに滞在中、1777年11月ごろの作と推定されている。なお、これより先、彼は1774年から翌年にかけてミュンヘンに旅しており、そのときに知り合ったフォン・ライジンゲン嬢から依頼されて完成させたのが、このソナタだった、とも考えられている。曲は3楽章から成るが、終楽章に、ピアノ協奏曲でいうカデンツァに当たる部分が見られる点は、特に注目される。

第1楽章：アレグロ・コン・スピーリト。ニ長調、ソナタ形式。

第2楽章：アンダンテ・コン・エスプレッシオーネ。ト長調、ロンド形式。

第3楽章：ロンドー～アレグロ。ニ長調、ロンド・ソナタ形式。

モーツァルト：ピアノ・ソナタ第14番 ハ短調 K.457

モーツァルトのピアノ曲では、明るい響きを持つ長調の作品が多いが、このハ短調のソナタは、ベートーヴェンの作品さえ想起させる重厚さを持ち、自己告白的な雰囲気も秘めた、特異な1曲として注目される。1784年にウィーンで完成されたが、翌年の出版に際して、同じハ短調の幻想曲（K.475）と組み合わせられた。そのため、ソナタの前にこの幻想曲を置いて演奏される場合もある。

第1楽章：モルト・アレグロ（または、アレグロ）。ハ短調、ソナタ形式。力強さと共に程よい緊張感を含んだ第1主題に始まる。一方、第2主題は、提示部では変ホ長調で、再現部ではハ短調で現れる。

第2楽章：アダージョ。変ホ長調、ロンド形式。穏やかな情緒に包まれた緩徐楽章。豊かな和声に彩られ、響きの彫りが深く、さらに、幻想性も帯びている。

第3楽章：アレグロ・アッサイ（または、モルト・アレグロ）。ハ短調、自由なロンド・ソナタ形式。シンコペーションのリズムを用いた主題により、不安な感情が高められるが、音楽の流れそのものは淀みない。

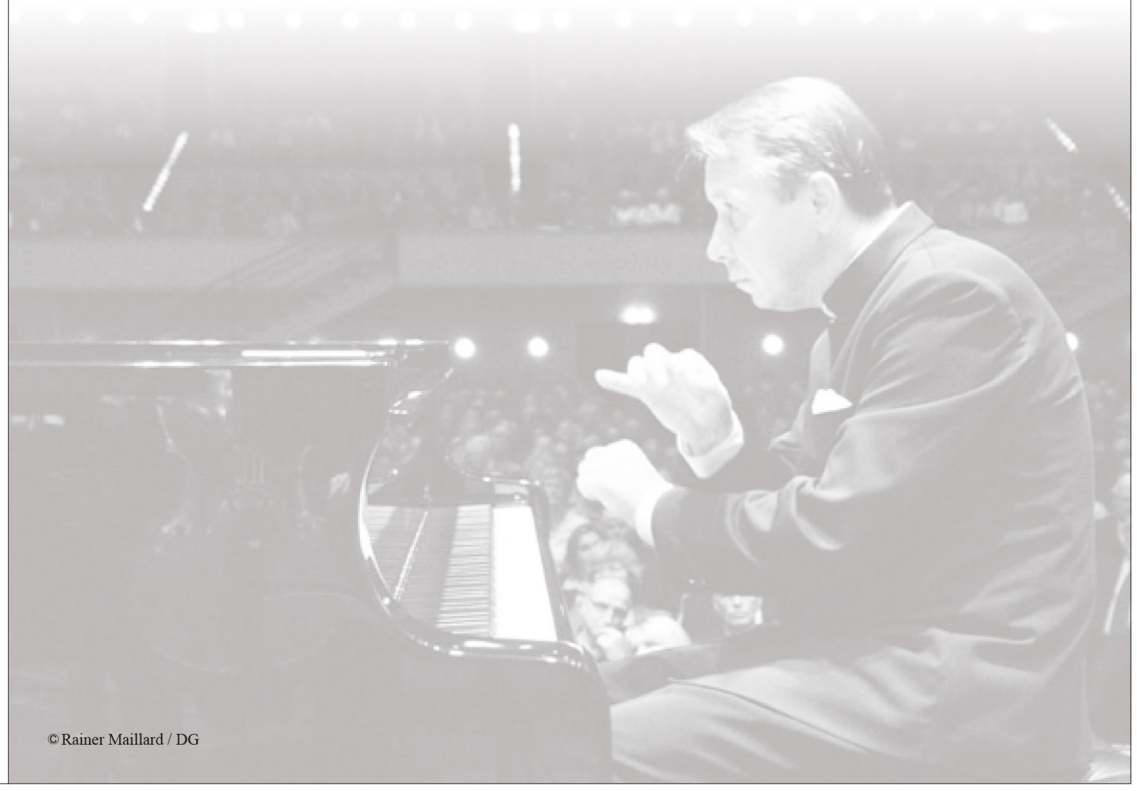
モーツァルト：ピアノ・ソナタ ヘ長調 K.533／494

このソナタは、「アレグロとアンダンテ」K.533を第1楽章、第2楽章とし、「ロンド」K.494を第3楽章として、合成されたという、珍しい作品である。作曲年代は、K.533が1788年1月、K.494が1786年6月とされるが、この別々に作曲されたものが、どのような事情で、1788年の出版に際して1曲のソナタとしてまとめられたかは不詳である。

第1楽章：アレグロ。ヘ長調、ソナタ形式。転回対位法の活用が目立ち、第1主題も第2主題も模倣的に扱われている点が、特に興味深い。このような手法は、モーツァルトの晩年に特徴的な作風の一つである。

第2楽章：アンダンテ。変ロ長調、ソナタ形式。第1楽章と同じく対位法的な書法が目立つうえに、半音階的な動きや大胆な和声、また、主題の旋律的な美しさも注目される。

第3楽章：ロンド～アレグレット。ヘ長調、ロンド形式。先の二つの楽章での緊張感を解きほぐすような、軽妙なロンド主題が、少しずつ形を変えながら繰り返される。挿入されるエピソードも、変化に富む。そして、カデンツァを伴ったコーダで終わる。



© Rainer Maillard / DG